体　　育

1　体育科における授業改善等の成果と課題

体育科では、「体育の見方・考え方を働かせ、課題を発見し、主体的、合理的、計画的な解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、健やかな心身の育成に資するとともに、生涯を通してスポーツの推進及び発展に寄与する資質・能力を育成すること」を目指して授業改善が進められている。

各学校では、主体的・対話的で深い学びの実現や、指導と評価の一体化を意識した単元計画の作成、１人１台端末を活用した学習活動の充実など、多様な授業実践が行われている一方で、育成を目指す資質・能力をより明確にした単元構想や評価方法の工夫、ICT や生成 AI を効果的に活用した探究的な学びの充実などに課題が見られる。

北海道教育委員会では、各教科等教育課程研究協議会や北海道高等学校教育課程研究協議会、学校訪問等を実施するとともに、各種研修会や、各管内における教科研修会等を通して、次のような教育課程実施上の成果と課題を把握した。

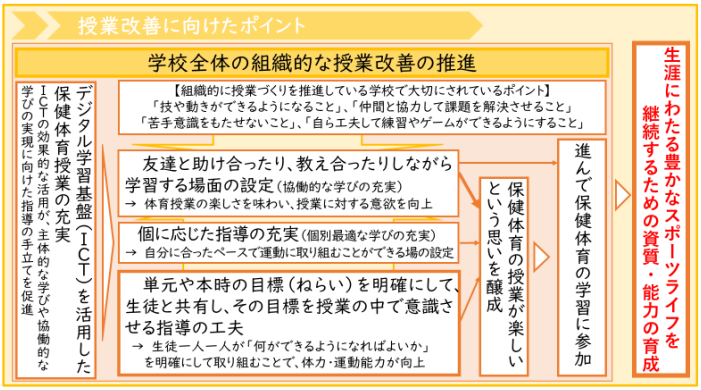


図１　授業改善に向けたポイント

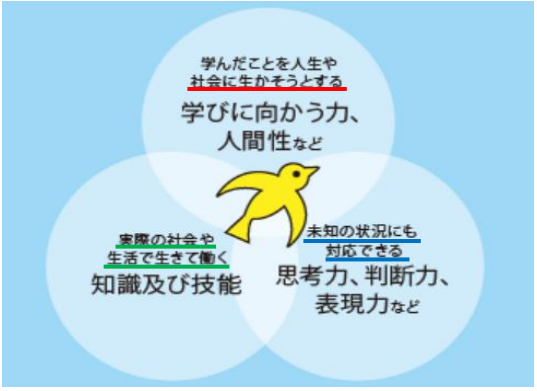
【参考：令和７年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査北海道版結果報告書（北海道教育委員会）】

	成果	課題
全体	・「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善について、学校全体で組織的に推進する学校が増えている。 ・各種研究協議会を通して、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に向けた取組が進められている。 ・生徒が、主体的に活動ができるよう、心理的安全性を担保した授業づくりが進められている。	・習得した知識を現実の事象と関連付けて理解し、概念としての知識の習得や深く意味理解をさせることに課題がある授業が見られる。 ・「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実について、校内における教員間の認識の差がある。 ・生徒を主語にした授業の在り方について、校内で一層研鑽する必要性がある。
体育科	・単元の目標、評価規準及び毎時間の学習課題を明確にするなど、単元全体を見通した授業づくりが進められている。 ・ICT を活用した動画撮影・分析、振り返り、学習記録の蓄積などにより、生徒の学習状況を把握しながら指導の改善が図られている。 ・技能の分析やゲームの中での課題解決など、生徒同士が対話を通して考えを深める協働的な学びが定着しつつある。 ・観点別学習状況の評価が適切に実施され、評価規準や評価場面を整理した単元計画を作成する学校が増えるなど、「指導と評価の一体化」を意識した授業改善が進められている。 ・安全管理に配慮した授業改善が進められており、熱中症対策や事故防止、健康観察の徹底など、安全・安心な学習環境づくりに対する意識が高まっている。	・習得した「知識・技能」を活用した「思考・判断・表現」の観点での活動が不十分な場合があるため、単元のゴールを明確にし、ゴールから逆算して学習活動を構想するなどの授業づくりを進める必要がある。 ・交流すること自体が目的となり、対話が思考の広がりや深化につながっていない場合があるため、教師の発問や課題設定を工夫し、思考を促す学習活動の充実を図る必要がある。 ・ICTを活用すること自体が目的化し、学びの質の向上につながっていない場合があるため、「体育や保健の見方・考え方」を働かせ、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図るためのICTの効果的な活用方法を検討する必要がある。 ・「思考・判断・表現」及び「主体的に学習に取り組む態度」の観点での評価方法について、ワークシートや振り返りのみで評価している例や、評価場面の設定が多い例が見られるため、評価場面を精選するとともに、パフォーマンス課題や学習過程を適切に評価する工夫が必要である。 ・個に応じた指導や共生の視点を踏まえた授業改善を一層充実させるため、体力差や技能差、障がいの有無、男女共習など、多様な生徒が互いを尊重しながら学ぶことができる授業づくりを一層促進する必要がある。

2　学習指導及び学習評価の改善・充実

前述の課題を解決し、新しい時代に必要となる資質・能力を育成するため、体育科における学習指導及び学習評価について、次の２点を示す。

(1) 育成すべき資質・能力の３つの柱と対応する科目の目標の再確認



○　学んだことを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間性等」の涵養

【体育】生涯を通してスポーツを継続するとともにスポーツの推進及び発展に寄与することを目指し、明るく豊かで活力ある生活を営む態度を養う。

○　実際の社会や生活で生きて働く「知識及び技能」の習得

【体育】スポーツの多様な意義やスポーツの推進及び発展の仕方について理解するとともに、生涯を通してスポーツの推進及び発展に必要な技能を身に付けるようにする。

○　未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成

【体育】スポーツの推進及び発展についての自他や社会の課題を発見し、主体的、合理的、計画的な解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を養う。

(2) 単元を見通した学習指導及び学習評価の工夫

評価に当たっては、教師が生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し、生徒が学習したことの意義や価値を実感できるようにすることで、自分自身の目標や課題をもって学習を進めていけるように、評価を行うことが大切であることから、「単元の指導と評価の計画」の作成を通し、単元を通して３観点の評価のバランスを考慮しつつ、できるだけ１単位時間で行う評価の観点を絞り、重点化する必要がある。

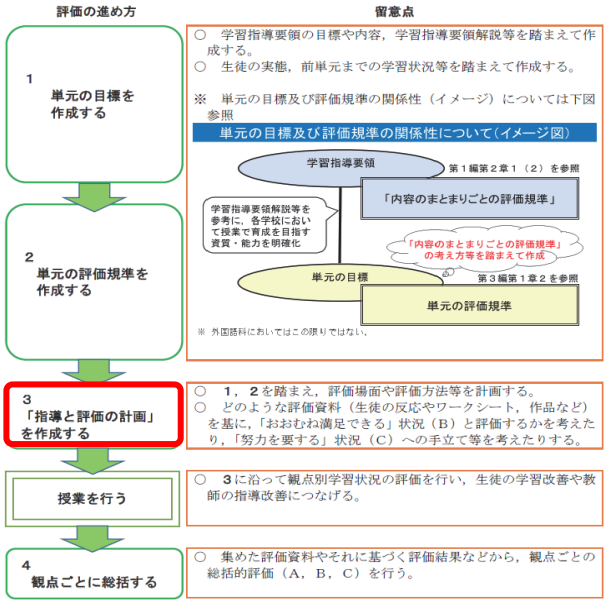


図３「「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料」（令和３年８月　国立教育政策研究所）

例えば、「思考・判断・表現」を評価するためには、授業改善をする中で、生徒が思考・判断・表現する場面を効果的に設計することが求められる。スポーツに関する科目においては、課題発見、練習計画の立案やルールの工夫などについてのグループでの話合いを、観察や学習カードの記入状況等を用いて評価することが考えられる。理論及び課題研究に関する科目においては、ペーパーテストのみならず、実習、ケース・スタディ（事例研究）、ディスカッション、マニュアル作成などの多様な活動を取り入れるとともに、ICT を活用して、生徒の思考の変容を記録したり、成果物をまとめたポートフォリオを用いたりして、評価するなどの評価方法の工夫が考えられる。

3　指導と評価の計画例

(1)「スポーツⅡ（球技）」の計画例

ア　単元の目標

(ｱ) 球技の推進及び発展に向けた多様な関わり方を理解するとともに、技能を身に付けることができるようにする。

(ｲ) 球技における自他や社会の課題を発見し、思考し判断するとともに、他者に伝える力を養うことができるようにする。

(ｳ) 球技の学習に主体的に取り組むとともに、公正、協力、責任、参画、共生などに対する意欲を高め、健康・安全を確保して、生涯を通してスポーツを継続するとともにスポーツの推進及び発展に寄与する態度を養うことができるようにする。

イ　単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
○知識 ①競技会などにおける運営方法や審判方法について理解している。 ○技能 ①他者と学び合う場面で、基本的な技の見本や改善のポイントを身体及び言葉などで他者に表現することができる。 ②体力や技能の程度、性別や目的、障害の有無など様々な違いを超えて、スポーツを楽しむために調整し合意したマナーを実践することができる。 ③競技会などの目的に応じた企画や運営をすることができる。	①発見した動きの改善点や、効果的な改善策について、活動場面で判断し仲間に伝えている。 ②練習やゲームを行う場面で、チームや自己の活動を振り返り、よりよいマナーや行為について提案している。 ③多様（目的、年齢、性別、経験、障害の有無など）な参加者と共に運動するための調整の仕方や競技会の運営方法等を提案している。 ④スポーツの推進及び発展に向けた視点から、自他の「する、みる、支える、知る」などの多様な将来の関わり方について、自他の考えたことを踏まえ、理由を添えて説明している。	①生涯にわたってスポーツを実践していく際の公正、協力、責任、参画、共生などに対する意欲を高めようとしている。 ②スポーツの推進及び発展に寄与する自己の姿勢や他者、地域社会との関わり方などのスポーツの価値を高めることに主体的に取り組もうとしている。

ウ　単元の指導と評価の計画（12時間）

次 【時間】	学びの過程	ねらい、学習活動等	重点	記録	備考 「概ね満足できる」状況(B)
第一次 【3時間】	習得	【ねらい】 ・他者と学び合う場面において、基本的な技の見本や改善のポイントを、身体の動きや言葉などで他者に伝えることができるようにする。 ・発見した動きの改善点や、効果的な改善策を、活動場面で判断し、仲間に伝えることができるようにする。 【学習活動】 ・状況に応じたボール操作と空間を埋めるなどの動きによって空間への侵入などから攻防を展開することができるようにする。 ・仲間と継続的に活動するための調整の仕方や初歩的な指導法について理解できるようにする。 ICTを活用して動画を撮影するなどして、動きの改善点を見つけて、そのポイントを教え合う。	技② 思①② 		・他者と学び合う場面で、基本的な技の見本や改善のポイントを身体及び言葉などで他者に表現している。 ・発見した動きの改善点や、効果的な改善策について、活動場面で判断し仲間に伝えている。 ・練習やゲームを行う場で、チームや自己の活動を振り返り、よりよいマナーや行為について提案している。

第二次 【2時間】	探究	【ねらい】 ・競技会などの目的に応じた企画や運営ができる。 ・競技会などにおける運営方法や審判方法について理解する。 【学習活動】 ・ICT を活用し、事故事例の分析などを通して、競技会の企画や運営における、健康・安全の確保について考える。 ・競技会における運営方法や審判方法など、スポーツへの多様な関わり方を実践する。 ICT を活用して、具体的な運営方法を探究し、実践する。 多様な参加者がスポーツを一緒に楽しむために、生成 AI を活用して、ルールづくりを行う。	技③知①	○	・競技会などの目的に応じた企画や運営をしている。 ・競技会などにおける、運営方法や審判方法について理解している。
第三次 【2時間】	活用	【ねらい】 ・体力や技能の程度、性別や目的、障害の有無など様々な違いを超えて、スポーツを楽しむために調整し合意したマナーを実践することができる。 ・競技会などの目的に応じた運営ができる。 【学習活動】 ・自分たちで考案したバスケットボールにおける競技会を運営し、体力や技能の程度、性別等の違いを超えて、仲間とともにスポーツを楽しむための調整の仕方を見付ける。	技③主①		・体力や技能の程度、性別や目的、障害の有無など様々な違いを超えて、スポーツを楽しむために調整し合意したマナーを実践している。 ・生涯にわたってスポーツを実践していく際の公正、協力、責任、参画、共生などに対する意欲を高めようとしている。
第四次 【2時間】 本時 (1時間目)	探究	【ねらい】 ・多様（目的、年齢、性別、経験、障害の有無など）な参加者と共に運動するための調整の仕方や競技会の運営方法等を提案ができること。 【学習活動】 ・生成 AI を活用しながら、前時の競技会における運営方法や審方法などで挙げられた課題を改善し、より多くの参加者がスポーツを楽しむための調整の仕方を提案する。 ICT を活用して、具体的な運営方法を探究し、実践する。 多様な参加者がスポーツを一緒に楽しむために、生成 AI を活用して、ルールづくりを行う。	思③	○	・多様（目的、年齢、性別経験、障害の有無など）な参加者と共に運動するための調整の仕方や競技会の運営方法等を提案している。
第五次 【2時間】	活用	【ねらい】 ・競技会などの目的に応じた運営ができる。 【学習活動】 ・自分たちで考案したバスケットボールにおける競技会を運営し、体力や技能の程度、性別等の違いを超えて、仲間とともにスポーツを楽しむための調整の仕方を見付ける。	主②	○	・スポーツの推進及び発展に寄与する自己の姿勢や他者、地域社会との関わり方などのスポーツの価値を高めることに主体的に取り組もうとしている。
第六次 【1時間】	探究	【ねらい】 ・スポーツの推進及び発展に向けた視点から、自他の「する、みる、支える、知る」などの多様な将来の関わり方について、自他の考えたことを踏まえ、理由を添えて説明する。 【学習活動】 ・ICT を活用しながら、自分たちが考案した競技会を通して、スポーツの推進及び発展に向けた視点から、自他の「する、みる、支える、知る」などの多様な将来の関わり方について、考察し、まとめる。	思④	○	・スポーツの推進及び発展に向けた視点から、自他の「する、みる、支える、知る」などの多様な将来の関わり方について、自他の考えたことを踏まえ、理由を添えて説明している。

エ　学習指導案（８時間目／12 時間中）

1　本時の目標

⑴　生成 AI を活用して、よりよい競技会の運営方法や審判方法を企画・立案することができる。

⑵　多様な参加者とともに運動するための調整方法について話し合い、まとめることができる。

2　本時の展開

過程	学習内容	生徒の学習活動	指導上の留意点
導入 （７分）	○　前時の確認	・前時に実施した競技会をもとに、課題を確認する。	・生成 AI の使い方を、学校における生成 AI 活用ガイドラインをもとに確認させる。
	＜想定される課題＞ ・ 参加者に応じた適切なコートサイズの設定 ・ 体格差や性別の違いを踏まえた、安全なルールの設定 ・ 全員がボールに触れ、得点に関わることができるルールの設定 ・ プレーの質や安全性を確保するためのボール等の用具の工夫		
展開 (38 分)	○　課題と目標の整理	・前時に実施した競技会の課題を、チーム構成、ルール、コートサイズなどに分類し整理して Google スプレッドシートにまとめる。	・Google スプレッドシートに書き出された内容について全体で共有し課題と目標を整理させる。
	○　課題の解決方法の確認	・Google スプレッドシートにまとめた内容を基に、生成 AI を活用して課題解決の方法を考察する。	・プロンプトに入れる内容として、前時までの課題をもとに具体的な情報を入力させる。
	○　課題解決に向けた整理と企画・立案	・生成 AI から得た課題解決のアイデアを Google スプレッドシートに書き出し整理しながら、企画・立案を行う。 ・整理した内容を全体で共有、確認する。（例：次時の内容の確認）	
まとめ （５分）	○次時への接続	・本時の目的と、これまでに作成した企画内容を確認する。 ・次時以降の学習の目的と見通しを確認する。	・本時の学習内容をこれまでの学習と関連付けて振り返り、次時以降の学習の見通しをもてるようにする。

オ　学習の進め方や学習評価の工夫

(ｱ) 学習の進め方

本時では、ICT を活用して前時までの課題を可視化して全体に共有することで、協働的に課題発見をさせ、競技会をより良いものにするための提案を行うことができるようにしている。

また、発見した課題について、生成 AI の回答を参考にしながら、参加者の多様性に応じた企画立案の見直しを図るなどして、解決の方法を考察している。

なお、生徒に生成 AI の出力はあくまでも「参考の一つ」であり「最適解とは限らない」ことを認識させるなど、生成 AI の回答をそのまま取り入れることのないよう注意が必要であるとともに、最終的な判断と責任は人間が持つことが重要であることを指導する。

(ｲ) 生成 AI の活用

本時と次時では、前時に行った競技会の課題と改善点を基に、競技会の企画・立案を行う。競技会実施前には見えなかった参加者の多様性（目的、年齢、性別、経験、障がいの有無などによらない）に対応するため、どのような改善策を講じるのかについて、生成 AI を活用することで、自分たちに足りない視点を見付けることができる。生成 AI との応答例では、コートサイズを小さくすること、ハーフコートで行うことやゴールの高さや大きさを変えること、ボールサイズを小さくするなどの工夫をしている。

(ｳ)「思考・判断・表現」の評価例

【評価規準】

目的、年齢、性別、経験、障がいの有無などに関わらず多様な参加者と共に運動するための調整の仕方や、競技会の運営方法等について、課題を踏まえて提案している。

【評価のポイント】

前時の競技会の課題と改善点を踏まえ、参加者の多様性を理解するとともに、参加者全員が共に運動を楽しむことができるよう、調整の仕方や協議会の運営方法等を考え、提案しているか。

【評価Ｃの生徒に対する手立て】

本時のねらいを確認するとともに、前時の競技会の課題や改善点を振り返り、自分が改善したい点を具体的に捉えられるようにする。その上で、生成 AI を活用して改善策を検討するためのプロンプトの作成方法を示したり、生成 AI から得た情報を比較・整理したりすることで、自分なりの改善策を考え、提案できるよう支援する。

生成 AI への入力及び回答例

【入力】
体格や移動能力の差を考慮したバスケットボールの試合のコートサイズと用具の工夫は？
【回答】
体格や移動能力に差がある人が一緒にプレーするなら、「全員がゴールまで移動でき、無理なくボールを扱えて、シュートを狙える」ことを規準にコートと用具を調整するとよいです。
・コートサイズの工夫
通常より小さいコートにする。
例えば、一般的なコートより幅・長さを縮める。移動距離が短くなり、体力や移動能力の差が出にくくなる。ゴールまでの距離を短くする。シュートラインをゴールに近付け、全員が届きやすくする。複数のシュートエリアを設定する。
移動能力が高い人は遠い位置、移動に負担がある人は近い位置からシュートできるようにする。
コートを区切って使う。全面を走り回るのではなく、ハーフコートなど狭いエリアでプレーする。
・用具の工夫
軽くて小さいボールを使う。通常のバスケットボールより軽いボールなら、握る・投げる動作がしやすい。低いゴールを使う。
ゴールの高さを下げることで、身長に関係なくシュートを成功させやすくする。大きめのリングを使う。
シュート成功の可能性を高められる。滑りにくいボールを使う。握力や手の大きさに差があっても扱いやすくなる。必要に応じて車椅子などの移動用具に合わせてコートを調整する。十分な通路幅や方向転換のスペースを確保する。
・具体例
例えば、授業やレクリエーションなら、
「ハーフコート＋低いゴール＋計量ボール＋個人ごとに異なるシュートライン」
という組み合わせが使いやすいです。
さらに、身長や移動能力が高い人ほど遠い位置からシュートするなど、「能力差をハンディキャップとして距離に反映する」と、同じチーム内でも公平性を保ちやすくなります。

４　主体的・対話的で深い学びの実現に向けたチェックリスト

図４は、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の視点として、『学習者』と『授業者』からの視点をまとめたものであり、主体的・対話的で深い学びを実現するために『授業者』が何に取り組めばよいのかを明示的に示したものである。

例えば、『授業者』は「具体物や例を提示して引きつける」ことを通して、『学習者』が「学ぶことに興味や関心をもつ」ことや、『学習者』が「見通しをもつ」ために、『授業者』は「既習事項を振り返る」ことや「生徒が自ら本時の目標をつかむようにする」などの視点が必要であると考えられる。

このように、図４における視点については、主体的・対話的で深い学びを実現するために、『学習者』と『授業者』の視点のどちらか片方が重要というものではなく、双方の視点の往還を通して実現していくことが重要である。

	授業改善に向けた『学習者』の視点	授業改善に向けた『授業者』の視点
主体的な学び	□学ぶことに興味や関心を持つ □自己のキャリア形成の方向性と関連付ける □見通しをもつ □粘り強く取り組む □自己の学習活動を振り返って次につなげる □生涯にわたって継続して運動に親しむ態度（公正、協力、責任、参画、共生など）を身に付ける	□既習事項を振り返る □具体物や例を提示して引きつける □生徒が明らかにしたくなる学習課題を設定する □生徒が自ら本時の目標をつかむようにする □学習課題を解決する方向性について見通しを持たせる □生徒が自分の考えを持つようにする □生徒の思考を見守る □生徒の思考に即した授業展開を考える □生徒の考えを生かしてまとめる □その日の学びを振り返る □新たな学びに目を向けさせる
対話的な学び	□生徒同士の協働を通じ、自己の考えを広げ深める □教職員との対話を通じ、自己の考えを広げ深める □地域の人など多様な他者との対話やICT等の活用を通じ、自己の考えを広げ深める □先哲の考え方を手掛かりに考える	□思考を交流させる □交流を通じて思考を広げる □協働して問題解決する □板書や発問で教師が生徒の学びを引き出す □ICTや生成AI等を活用して、多様な意見に触れさせる
深い学び	□各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせる □知識を相互に関連付けてより深く理解する □情報を精査して考えを形成する □問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう □実生活、実社会と関連付けて理解する □「する、みる、支える、知る」の視点から運動やスポーツを深く理解する	□資質・能力を焦点化する（身に付けさせたい力を明確にする） □単元や各授業の目標を把握する □ねらいを達成した生徒の姿を具現化する □教材の価値を把握する □単元及び各時間の計画を立てる □目標の達成状況を評価する

図４　主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善の視点について（令和２年６月文部科学省　国立教育政策研究所）を基に一部加筆